

## 落ち椿

森本真智子

ハタリと音がして 椿の花は落ちたのだった  
ハタリと音がしたのも

錯覚だったかも知れないと思つたほど

それは、かすかな音であり

私はむしろ 気配だけで 振り向いたのかもしない

黄色の花粉を 大地に わざわざ散らし

花は 落ちたそのままの姿で ため息をつくほど 美しかった

地に落ちた花は 花弁のひとひらもほどくことなく  
一本の雌しべを残して

抱かれていた緑の うてなに ひつそり別れを告げたのだった

海を渡つた島には 椿の花で糸を染め

ハタを織る女性たちが いるという

織り上げた布は 椿の花の あの濃い緋色には遠く  
ほのかに淡い 紅色をして いるのだという

固く青い 小さな蕾を作つた椿の木たちは  
その蕾が 赤く開くまでの長い時間と

やつと咲かせた花が

あっけなく地に落ちるまでの 短い時間を  
思つたことはあるのだろうか

ひとも また同じかもしれない

美しい時間は 短いものであろう

だが人は 決して あっけなく落ちて 枯れたりはしない  
長く 長く 花を咲かせ続けることができるのだ

そして人は 枯れない 多くの実をつけることも出来る  
生き物なのだから

